立ち上がりの技術 vol.4 レコメン堂

2019年11月8日（金）～12月26日（木）
期間中の金土日開室 ※12月23日（月）～26日（木）は開室
13:00～20:00（最終日16:00まで）／入場無料
東北リサーチとアートセンター［TRAC］
主催：やわらかな土から、せんだいメディアテーク　企画：やわらかな土から

絵、写真、音楽、場づくり…。誰かがつくった“表現のようなもの”を〈他薦〉によって集めた展覧会。

【参加アイテム】
※イベント開催中は展示を見ることができませんので、予めご了承ください。
■誰でつがくサロン「表現ってなんだろう？」
11月22日（金）19:00-21:00
【会場】TRAC　【参加費】500円
■レコメンバトル
12月15日（日）14:00-16:00
【会場】せんだいメディアテーク 7階スタジオa　【参加費】無料
■交流パーティー
12月15日（日）17:00-19:00
【会場】TRAC　【参加費】無料

東北リサーチとアートセンター［TRAC］
〒980-0804
仙台市青葉区大町2-3-22第五菊水ビル3階
電話：022-397-7256（金土日対応・臨時休業あり）
E-mail：artnodeTRAC@gmail.com

青野文昭 ものの，ねむり，越路山，こえ

2019年11月2日（土）～2020年1月12日（日）
11:00～20:00（入場は19:30まで）
※11月26日は休館、12月29日から1月3日は年末年始休館
せんだいメディアテーク 6階 ギャラリー 4200

【入場料】一般500円（大学生・専門学校生含む）、高校生以下無料（豊齢カード、障がい者手帳をお持ちの方は半額）

主催：せんだいメディアテーク（公益財団法人仙台市市民文化事業団）
助成：一般財団法人 地域創造、公益財団法人 花王芸術科学財団

「なおす」ことを主題に、家具や日用品 などを用いながら廃棄物の文損箇所を補完することで、新たな形態を生みだしている美術作家 青野文昭。長く仙台で活動してきた青野のこれまでの作品とともに、震災以後の表現の変化もふまえた、新たな展望を紹介します。

【関連イベント】
■福住廉（美術評論家）× 青野文昭 対談
2019年11月16日（土）13:30-17:30
■横木野衣（美術評論家）× 青野文昭　対談
2019年12月7日（土）15:30-17:30

JOURNAL
art node
artnode.smt.jp

アートノード　ジャーナル　6号　2019年9月26日 発行
編集長｜甲斐賢治（せんだいメディアテーク）
編集｜冶上 翔（せんだいメディアテーク）、佐藤綾香、長内綾子（communa）
アートディレクション・デザイン｜homeskickdesign
印刷｜株式会社文展美術印刷
お問い合わせ・企画・発行
せんだいメディアテーク（公益財団法人 仙台市市民文化事業団）
〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1／TEL：022-713-4483
E-mail：artnode@smt.city.sendai.jp／URL：http://www.smt.jp
アートノードとは、「優れたアーティストのユニークな視点と仕事に多くの人が関わり、熱のある「アートの現場」を仙台に創出する事業です（2016年度～）。
本誌ジャーナルは、アートノードの高揚を広く伝えるとともに、アートが東北の人・資源・課題と接続するための話題提供を行います。
※「アートノード」は「せんだい・アート・ノード・プロジェクト」の略称です。
せんだいメディアテーク
sendai mediatheque

© 2019 sendai mediatheque All Rights Reserved. 本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます
この用紙はリサイクルできます。

スタジオ開墾 通信

芸術の秋がやってきた！

関本欣哉

卸町の倉庫を改修し今年オープンした、アーティスト&クリエイターのための制作スタジオ「スタジオ開墾」。電動工具完備の共有スタジオは1時間から利用可能なほか、待望のカフェもオープン。国内外選りすぐりの写真集や画集を扱うブックショップも併設しています。現在スタジオでは、6組の利用者が大型の作品制作に取り組んでいるほか、展覧会やイベントが初冬まで目白押しです。今回の通信では、8月末から開催となった仙台と台湾のアーティストによる国際交流プログラムをご紹介します。

「コンテンポラリー仙台湾（仙台湾＝仙台＋台湾）」が示す可能性

在仙作家の青野文昭さんと台湾の黄琬玲（ファン・ウンリン）さんが、アメリカでのアーティスト・イン・レジデンス（※）で出会い、意気投合したことを機にスタートした、台湾のアーティストグループとGallery TURNAROUNDの交流プログラム「コンテンポラリー仙台湾」。今年6月には仙台ゆかりのアーティスト8人が台北を訪れ、「福利社 FreeS Art Space」でグループ展を開催し、仙台では台湾のアーティスト9名が8月末からの2週間、グループ展を開催しました。会期中には、それぞれの作品背景やアートを取り巻く環境等について理解を深めるトークイベントも開催し、両国の作家はもちろんのこと、来場者からも高い関心を集めました。

また、展覧会に先立ち1ヶ月間の滞在制作を行った黄琬玲さんは、私が役員を務める花壇・大手町町内会（青葉区）の活動に参加し、地域の子どもたちや住民のみなさんと交流をしました。美術界隈にとどまらない経験が、アーティストに新たな気づきを与え創作の種となりますし、地域の方たちにとっても異なる文化や考えに触れる機会となります。スタジオ開墾を制作の拠点とするARTプログラムを、今後も継続していく予定です。ぜひご期待ください！

（※）アーティスト・インレジデンス（AIR）
招聘アーティストがある土地に滞在し、作品の制作やリサーチ活動を行なうこと、またそれらの活動を支援する制度のこと

AVAT x Gallery TURNAROUND 國際交流展
「宮城藝術的奇異點（宮城アートの特異点）」
【会期】2019年6月14日-7月6日　【会場】福利社 FreeS Art Space　【参加アーティスト】青野文昭、大槻英世、尾崎森平、佐々 瞬、瀬尾夏美、タノイガ、門馬美喜、APE TOPE　【レジデンス・アーティスト】佐々 瞬

「コンテンポラリー仙台湾（仙台湾＝仙台＋台湾）」
【会期】2019年8月31日-9月15日　【会場】スタジオ開墾／Gallery TURNAROUND　【参加アーティスト】王徳瑋（ワン・ディンイエ）、常陵（チャン・リン）、曾雍寧（ツェン・ヨンニン）、陳擎耀（チェン・チンヤオ）、楊仁明（ヤン・レンミン）、楊茂林（ヤン・マオリン）、賴失銘（ルー・シェンミン）、林冠名（リン・ファンミン）、廖國平（リョウ・シペイ）　【レジデンス・アーティスト】黄琬玲

11.9（土）-24（日）
どよん展（仮題）
12:00-18:00／入場無料／月休／韓国・ソウル在住の アーティスト、美術とドキュメンタリー映画制作の境界を行き来した活動を行っています。東日本大震災の直後から毎年仙台を訪れ、東部沿岸部の風景記録を重ねてきました。本展では、9年に渡る記録を用いた新作を展示するほか、作家が在廊し対話のためのコーヒーを振る舞います。

10.19（土）・20（日）
秋の卸町ふれあい市「スタジオ開墾」オープンスタジオ
両日とも10:00-15:00／入場無料／スタジオ開墾が企画する作品展示の ほか、ものづくり体験ワークショップ（有料）を連日開催します。19日（土）はエアブラシアーティストA-HANDによるハロウィン・ボディペイント体験、20日（日）は群馬県桐生市のDJユニット「仲清太」によるどんづくりWS（つくったらどんはお持ち帰り可能）も、詳細はスタジオ開墾のウェブサイトをご覧ください。

10.12（土）-14（月・祝）
SHOKKI: TOO MUCH TO MATCH
11:00-19:00／入場無料／ハンドメイドのセラミックレーベル SHOKKIは、アーティストやアパレルブランド、出版社などとのコラボレーションによってアートピースやプロダクトを製作するシリーズ「TOO MUCH TO MATCH」を展開してきました。本展では、2018-2019年に製作されたコラボレーションワークを展示販売します。

EVENT PICK UP!

【予告】11月末頃よりアーティストを招いたトークシリーズ「ART KAIKON 2019」（2019年度仙台市文化プログラム）も開催予定！乞う！期待！

スタジオ開墾（運営：協同組合仙台卸商センター）
〒984-0015 仙台市若林区卸町2-15-6
営業時間 10時-19時／月曜定休
www.kaikon-sendai.com

開墾 開墾は、1990年代後半よりアート作品の制作・発表をはじめる、2010年、社会に「開ける現の場」としてギャラリー・アラウンドを設立。2016年には美術学校「仙台絵画舎」を開校。2012年より「せんだいアンデパンダン」展（代表：2019年より野口の表庫を改修し展生した「スタジオ開墾」ディレクション。

pineapple print press studio

TALK タイのアートスタジオの現在

タイの版画スタジオが仙台にやってきた！

アートノードのTALKシリーズでは、仙台のアートシーンで活躍するパートナーらと協働し、市内の拠点を会場にトークイベントを展開しています。8月17日（土）には若林区の印刷・製本スタジオ「analog」で、タイ・バンコク市にあるエッチング版画スタジオ「pineapple print press studio」のメンバー3名を招いて開催しました。

バンコク市中心部から南に約4キロ離れたエリアに位置する「pineapple print press studio」は、版画家のコントーンさんとともに、広告マーケティングや法律を専門とするアカホルさんとシャクリットさんの3名で立ち上げられました。版画というメディアが一般にあまり浸透していないタイにおいて、版画芸術を広めることを目的としています。スタジオでは、未経験者でもエッチングやモノプリントをはじめとした技術を体験できるワークショップやイベントを開催しており、版画制作の魅力を多様なかたちで伝えています。

また、より多くの人に版画芸術を体験してもらうために、バンコク市内外のインターナショナルスクールや大学などで出張ワークショップを行っているほか、子どもたちでも簡単に制作できるコム版画ワークショップを開催するなど、スタジオオオ外での版画普及にも積極的に取り組んでいます。

タイを代表する著名アーティストと協働し版画作品を制作する取り組みも興味深い活動のひとつです。絵画や彫刻を専門とするアーティストと制作する場合、「どんな版画作品をどのような技術を用いてつくるか」を、丁寧にヒアリングしたうえでアドバイスしながら制作するのだとか。画面構成やインクの色など、互いに意見交換や試作を重ね完成形を導き出すだ し、アーティストたちが版画を新たな表現手法とすることに協力しています。

今後は国内外のギャラリーが出展するアートフェアへの参加や、オンラインでの作品販売も視野に入れているほか、今回のTALK会場であるanalog と連携し作家交流をしていきたいとのことでした。仙台の作家と「pineapple print press studio」の合作が実現する日はもうすぐそこかもしれません。

トークイベント終了後、版画作品について1点ずつ参加者に説明するコントーンさん

撮影：渡邊博一
［右］雑がみで技術を発揮し、龍をモチーフに制作された作品
［下］来場者は雑がみ作品をたっぷりと堪能し、工作も楽しみました。

雑がみが呼んでる!?「わたしを使ってちょうだい！」

2017年度に始まった「ワケあり雑がみ部」は、不要物を利用した作品やシステムづくりで知られるアーティストの藤浩志さんによるプロジェクトです。ごみ分別区分の一つである雑がみが家庭ごみと混合されないよう、リサイクル資源「雑がみ（空き箱、紙袋など）」への意識を高めたいという仙台市環境局からの投げかけで市民参加型の部活動として始まりました。今年で3年目を迎えた活動の様子はいかに？

アート活動を通じて、雑がみへ新たな命を吹き込む「ワケあり雑がみ部」。子どもから大人までが部員となり、約2ケ月半にわたる活動のなかで、それぞれが自分の視点で工作を楽しみました。その成果は、仙台七夕期間中にせんだいメディアテーク1階で発表されました。

「雑がみという素材だからこそ、表現できるものがある」と話す部員さん。展示作品からは作者の強いこだわりが感じられ、会場は熱気に溢れていました。藤さんは「一度雑がみ工作を作ってみると想像力の幅が広がる。来年は雑がみ部のなかで“はこ部”や“おりがみ部”など素材ごとにチームを作り、ゆくゆくは「雑がみ大全」も出版したい」と次のアイデアを語っていました。

現在、活動は館外へも飛び出し、商店街でのイベントへの出展や、小学校の社会学級主催でワークショップが開かれるなど、街へ広がっています。

一度は役目を終えた雑がみが、分別されれ色とりどりの素材にかえることで、創作欲をかきたてる!?

藤 浩志（ふじ・ひろし）
美術家／プロジェクトディレクター。1960年生まれ。1990年代後半より、「ものづくり」を通じた地域プロジェクトを展開。2000年に地域資源・遺伝子技術・協働関係の出品参加800ロジェクト多数。現在秋田公立大学大学院教授、NPO法人アートセンターあきた理事長、株式会社藤スタジオ代表。

仙台インプログレス

「みんなの木道」完成！

アートノードではフランスを拠点に活躍する国際的アーティスト・川俣正さんと「仙台インプログレス」という長期的なプロジェクトを2017年より進めています。昨年は貞山運河を渡る「みんなの船」を制作。今年は海側に広がる防災林へと続く道に木道を設置しました。7月27日に開催された「貞山運河の渡し船と新浜フットパス2019 part1（新浜町内会主催）」では、船が運河を渡り、新たに完成した木道もお披露目となりました。

八大龍王碑を囲む木道

2つの石碑を文化資源として捉え直す

「津波で橋が壊されてしまい困っている」という新浜地区住民の方々の声から始まった「みんなの橋プロジェクト」。完成する作品が、震災前のように貞山運河を渡る橋として機能することを目指しています。その過程で、昨年は貞山運河を渡る「みんなの船」を完成させました。今年は、震災後、新たに松が植えられた海側のエリアに、川俣さんと在仙の若手アーティストや京都の学生が「みんなの木道」を制作しました。

制作に一週間ほどかかったという木道は全長約120m。一部はベンチにもなる高さに設えられており、目前には150年前に建立された海難防止・海上安全を祈願する「八大龍王碑」がそびえ立ちます。そこから海側へ松の植林地帯を100mほど進むと、新浜地区における昭和の植林事業を伝える「愛林碑（あいりんひ）」も見ることができます。当時から新浜地区の方々が海とともに生活し、自分たちの手で松を植え潮風や飯鐘から地域を守っていたことがうかがえ、石碑がこの土地の暮らしぶりを伝える重要な歴史的遺産であることを学びました。「みんなの木道」は海と私たちを繋ぐだけでなく、新浜地区が紡いできた歴史と、現代に生きる人々を結びつける重要な役割を担っているのかもしれません。

この日の「新浜フットパス」では「みんなの船」で運河を渡ったほか、NPO法人広瀬川ボートくらぶの協力によるEボートの乗船体験も。参加者は水の感触を上手く掴みながらパドルを漕ぎ、運河に沿って水面を移動しました。途中には、ハゼ釣りをする人やサイクリングロードを自転車で走る人も見受けられました。

イベントに参加した女性は「ゆったりとした心地のいい時間でした。木道ももっと長く、海へと続いたらいいですね」と笑顔を浮かべていました。「みんなの橋」が完成し、この木道で海へも行けるようになれば、きっとさらに貞山運河でのアクティビティは充実し、人々が貞山運河一帯で楽しめるはずです。

フランス・ナント市が展開するLe Voyage à Nantes 2019 で今年お披露目となった「The Nest」（巣）

貞山運河で芸術文化を肌で感じられるように

川俣さんの最新作が設置されているフランス・ナント市は、都市計画に文化政策を積極的に取り入れている街です。毎年開催されるアートプロジェクト「le voyage à Nantes」は、歴史的街並みと現代アート作品を、経済的観光資源とするために始まりました。「みんなの橋」が完成し国内だけでなく海外からも様々な人が訪れることになれば、新浜地区がより大きな盛り上がりを見せることが想像できます。川俣さんは今後の展望として「海とまちを日常的に繋げるには貞山運河がキーワードになる。この歴史的遺産をさらに活性化していくために船つき場なども制作したい」と語ります。

少しずつ育つ黒松の海岸防災林や広い海、大きな浜辺といった見慣れたはずの景色に「みんなの木道」が設置されたことで、ひとりひとりが新たな価値を発見する一日でした。この場所に賑わいが訪れるのも、そう遠くない未来かもしれません。

［右］地域の人々や京都の学生が協力し合って制作しました　［左上］最後に新浜町内会会長・遠藤芳広さんが筆を取りました　［左下］「新浜みんなの家」で参加者を交えたミーティング

撮影：渡邊博一

川俣 正（かわまた ただし）
1953年北海道生まれ。1982年第40回ヴェネツィアビエンナレ、1987年ドクメンタ8はじめ出品多数。現在パリ国立高等美術学院教授。準備中、青森県立美術館、横浜美術館、金沢21世紀美術館（有料）を連日開催します。19日（土）はエアブラシアーティストA-HANDによるハロウィン・ボディペイント体験、20日（日）は群馬県桐生市のDJユニット「仲清太」によるどんづくりWS（つくったらどんはお持ち帰り可能）も、詳細はスタジオ開墾のウェブサイトをご覧ください。

展覧会レポート　ティチェック パンチュク グクチャン

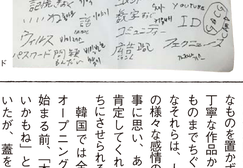
뒤죽박죽 극장 ／まちがい劇場／

廣川 穀

2019年6月14日～23日、ソウルの弘益大学前（ホンデ）にある〈雨乃日珈琲店〉（※1）で工藤夏海さんの個展が開催された。

個展のため、夏海さんは親友の「book cafe 火星の庭」（※2）の前野久美子さんと共に、イ・ラン（※3）と私と愛猫のジュンイチが暮らす我が家にやってきた。「マンナゴッシッポソヨ（会いたかったです）」と笑顔の挨拶で始まり、展示の準備からオープニングまでの間、毎日修学旅行のように夜な夜な遅くまで話をし、たくさん遊んで腹がちぎれるくらい笑って、朝から大人4人が路上で号泣しながらの別れで終わった一週間は、それはそれはとても幸せな日々だった。

イ・ラン（左）と工藤夏海（右）による「まちがい劇場」の様子
撮影：清水博之


即興歌「インターネットって何」歌詞カード

2018年3月にイ・ランが日本ツアーで仙台を訪れた際に夏海さんの在籍する yumoo（※4）と共演して以来、すっかり意気投合した夏海さんとイ・ラン。二人は互いに連絡を取り続け、夏海さんが東京で個展を開いた際はイ・ランがソウルから東京へ、イ・ランが東京でライブをした際は、夏海さんが仙台から東京へと交流を深め、イ・ランは夏海さんの個展示を是非ソウルでできたらと友達の雨乃日珈琲店に話をし、開催の流れとなった。

「뒤죽박죽 극장（まちがい劇場）」。これは今回の個展のオープニングで夏海さんがイ・ランや来てくれたみんなと一緒に作り上げた、夏海さんの人柄が現れた即興人形劇のタイトルだ。正解というものを求めず、社会にとっては不正解かもしれないありのままの姿を肯定しようとし、肩肘を張らない関係を求めようとするようなタイトルだ。

夏海さんの作品もまた綺麗で洗練されたものではなく、人間臭い表現はかりだ。代表作みたいなものを置かず、時間のかかった丁寧な作品から落書きのようなものまでちぐはぐに並んだ多様なそれらは、人間の持つたくさんの様々な感情のひとつひとつを大事に思い、ありのままの自分を肯定してくれているような気持ちにさせられる作品だった。

韓国では全く無名の作家のオープニングは当日雨も降り、始まる前、「本当に一人も来ないかもね」と笑いながら話していたが、蓋を開けてみれば開場を待つ列までができる予想外の満員御礼だった。長机を舞台に小さい人形が入れ替わり立ち替わり登場し「まちがい劇場」が始まる。イ・ランが手にした人形が、「何でこのイベントを知った？」と問うと「インターネット」と声が上がり、「インターネットって何？　そうだ、インターネットって何？　という歌を作ろう！」とイ・ランが音頭を取り、みんなから「インターネット！」と思い浮かぶ言葉を集め、ギターを弾きながらその場に居合わせたすべての人と一緒に即興で歌をつくった。最初はイ・ランが奏でる幾つかのコードを聞きながらみんなで声を出す練習をし、次は耳を塞いで自分の中で聞こえたありのままの音をいっせいに歌ってみた。すると不思議な事に人それぞれ少しずつ音が違ってそれが重なった時にとても美しいハーモニーとなり、無限の可能性を感じるようだった。ひとりひとりの感じる音を肯定し、いくつもの「まちがい」の重なりに正解という限界を軽く飛び越えた瞬間を見る事ができた。

10月、イ・ランと仙台に行って夏海さんやん美子さんとともに是非人形劇をしたいと思っている。その時はみんなと一緒に思う存分まちがいたいと思っている。

廣川 穀（ひろかわ・たけし）
1981年仙台生まれ、ソウル在住。木版画作家。韓国の民衆美術に魅せられ2013年渡韓、現在メーリングサービス「アリババと30人の友達」で版画絵本を連載中。hirokawatakeshi.com

（※1）2010年ソウル・弘大（ホンデ）に開業の、ライターの清水博之さんと書道家の出田亜沙子さん夫妻が経営する洗練されていて落ち着いた空間型の喫茶店。時々店内で展示を開いたり、海外からインディーミュージシャンが来時した際にアコースティックライブを開いたりしている。
（※2）2000年開業の仙台・本町にある古本もコーヒーもライブも勉強会も頼けさもある稀有な店。
（※3）1986年ソウル生まれ。シンガーソングライター、映像作家、コミック作家、エッセイスト。多彩な才能を発揮して韓国のアート音楽シーンで注目を集める。アルバム『ヨンヨンスン』（神様ごっこ）（ともに日本版は2016年Sweet Dreams Press.より）、エッセイ『思してくてかっこいい人』（2018年、リトルモア）コミックエッセイ『私が30代になった』（2019年、タバブックス）、2019年7月最新作ライブアルバム『クロミョン LangLee Live in Tokyo 2018』（Sweet Dreams Press）を発売。
（※4）結成21年目を迎える宮城・仙台を拠点とする論谷浩次率いる音楽グループ。仙台に住んでいたらライブがあるたびに見に行きたいバンド。アルバム『小さな穴』（2003年マジキック/2016年7e.p.）『明滅と反響』（2006年マジキック/2018年7e.p.）『これが現実だ』（2010年）『鬼火』（2016年ともに7e.p.）。

JOURNAL GALLERY
毎号アーティストをピックアップしてご紹介します

「闘いと生活の地層が足元にある」
2019／紙、木彩、インク　297×420mm

今年6月に個展のため訪れた韓国の首都ソウル。大都市を南北に隔てる漢江（ハンガン）の川沿いを友人とサイクリングした経験から生まれた描き下ろし作品です。私たちの日常をとりまく世界に存在する自然や人びとの混沌が、「不動・時間・堆積」と「流動・ゆれ・再生」の対比として、カラフルな画面に表されています。

工藤夏海（くどう・なつみ）

1970年宮城県生まれ。人形劇や楽器演奏もする美術家。近年の個展に「世の中グラデーション」（2017年、仙台 ギャラリーターンアラウンド）、「まちがいの実」（2018年、東京 ブックギャラリー ポポタム）、「工藤夏海 exhibition」（2019年、ソウル 雨乃日珈琲店）がある。人形劇団ポンコレラ主宰、音楽グループyumboの管楽器担当。仙台にて喫茶ホルン経営。約25年にわたる創作活動をまとめた作品集「世の中グラデーション」（2017年／B5版／154頁／カラー／限定600部）発売中。

代表作でもあるポンコ人形はソウルでも大好評！
撮影：清水博之